

おおやま  
蓮田の大山信仰

【蓮田の大山詣で】

《はじめに》・・・蓮田市内では、大山講は平成10年頃まで、行われている地区がありました。

ただ、大半は太平洋戦争や、戦後の生活様式の変化・交通網の発達などにより、見られなくなってしまいました。

現在も残る大山灯籠の習慣や道しるべによって、その名残を知ることができます。

《御師来たる》・・・各村々には、正月明けに御師（先導師）が大山から各地域を廻って来て大山参詣の案内をし、講員分のお札を講元こうもとに置いていきました。

明治前期に成立した大山阿夫利神社所蔵の「開導記」には、先導師ごとの檀家数が各村ごとに記されています。その中には、蓮田市の村々が記載されています。

《代参者の選びかた》・・・各村の大山講では、年に1回、おおよそ10人に1人くらいの割合で、代参者を抽選で選びます。ですから、10年でほぼ全員にひとまわりするようになっていました。代参は、明治初めは名主が代表して行っていたところもあったようですが、蓮田市には明治45年の大山講の抽選くじの控えが残っています。

大山阿夫利神社は雨乞い、農業の作神様というほかに、出世の神様という一面もあったため、男性は15、6歳になると代参者に同行させてもらうことも多くありました（初山）。ただ、代参の人は集まった講金で参詣できましたが、同行させてもらう人は「平参り」といって、自分で負担しなければなりませんでした。

《参詣の時期》・・・参詣には春山に行く地区、7月24日前後からお盆前の夏山に行く地区がありました。また、1年に1回代参者が行く地区や、普段は1年に1回、そのうち5年に1回は全員で詣でる地区などがありました。



道しるべ



(前面)



(後面)



(前面下部分)

御師（先導師）宿坊の石碑（昭和12年6月建立）

《代参の方法》・・・出発の前には水ごり（水を浴びて体を清めること）をすることもありました。大山に到着すると、それぞれの地区の先導師の宿に泊まり、阿夫利神社に参詣して講員全員のお札をもらいました。また、講によっては辻札つじふだをもらうところもありました。交通網が発達してからは日帰りも多くなりましたが、帰りには江ノ島や鎌倉見物をするのも楽しみでした。

《帰ってからは》・・・帰ると辻札を集落の境に篠竹しのたけの先を割ってはさんで立てたり、講員にしゃもじやマッチなどのおみやげを添えて、お札を配りました。

各家では、受け取ったお札は、神棚の大神宮様（伊勢神宮）の隣に置いたりしました。

また、初めて参詣した男性は、帰ってくると一人前の男子と認められ、藻刈りなどの村の仕事にも参加できました。

【蓮田の大山灯籠】

蓮田市の中には、現在でも7月の終りから8月の17日まで、毎晩大山灯籠に火を灯す地区があります。

大山灯籠は石尊灯籠とも呼ばれており、木製の組み立て式で、8月中旬に撤去するまで、毎晩火を灯します。

大山詣での際の、山歩きの安全を祈願したものと思われます。大山講がなくなった現在でも、大山灯籠献灯の習俗が地域の行事として引き継がれています。



高虫の大山灯籠

# もっと知りたい大山信仰

## 【大山阿夫利神社の歴史を知りたいな】

神奈川県伊勢原市大山には、平安時代の文献に登場する阿夫利神社と奈良時代の創建と伝えられる雨降山大山寺があります。「あふり」は「雨降り」につながるとされ、雨乞いの信仰と強く結び付いていました。また、山頂の巨石は石尊大権現の名で信仰され、大山は神仏混淆の修験者の山岳信仰の場でした。

江戸時代になると、徳川家康の寺院統制によって、山頂の石尊社と大山寺、八大坊を中心とする組織に改革されました。

その後、明治初年の神仏分離の際、山頂の石尊社は阿夫利神社本社と改められ、大山寺は縮小して移転しました。大山寺の跡地は阿夫利神社下社となり現在の配置になりました。

## 【大山阿夫利神社ってどこにあるの？】

神奈川県のほぼ中央、伊勢原市大山にあります。大は、標高1252mの丹沢山系東端の一峰で、別名雨降山、阿夫利山とも呼ばれています。

## 【御師って、どんな人かな？】

徳川家康の寺院統制のとき、妻帯の僧や修験者たちは下山を命じられました。下山した宗教者が山麓に居住して御師となりました。

御師たちは江戸時代末期には160人余りいたとされています。彼らは大山山麓に居住し、参詣者のための



大山（神奈川県） 「川越の大山信仰」より



阿夫利（あふり）神社

宿を提供するとともに祈禱をしたり、参詣の案内をしたりしました。

各地を歩いて参詣の講をつくり、自らの持ち分とする大山講の講員を檀家として、師壇関係を結びました。一度結んだ御師と檀家のつながりは深く、他の御師の檀家に関わることは禁じられていました。

御師たちは一年のうちに定期的にお札や土産を持って壇回りをを行い、初穂料を集めました。生計のため、信者獲得のために精力的に各地を回ったのです。

その後、それまでの講組織は大山敬神講社に、御師は先導師となりました。



79 東海道五十三次船見合 程々社 講中儀(近代版川越) 神奈川県立歴史博物館蔵

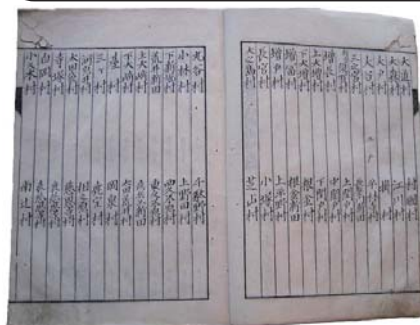
## 蓮田にはないけど・・・ちょこっとコラム

おみきわく おさたち むかたち  
「御神酒杵と納め太刀・迎え太刀」

さいたま市や川越市など近隣の地域ではお神酒を運んだ「御神酒杵」といった道具や、「納め太刀」「迎え太刀」といった、木製の太刀が残っています。

源頼朝の戦勝祈願の故事にちなんだもので、江戸時代の庶民の間で流行しました。大きな太刀をかついで大山に参拝し、太刀を奉納すると、すでに納めてある別の太刀や、前年に自分達が納めた太刀を持ち帰るといったものでした。現在も神社に奉納してある太刀を洗って町内を巡る「お太刀洗い」という習慣が残っています。

また、御神酒杵は金箔を施した豪華なもので、2基1対のものを天秤棒で通して担いで運びました。ただ、残念ながら、蓮田市ではこのような習慣があった記録は残っていません。



開導記



【引用参考文献】 ・さいたま市立浦和博物館「雨あめ降れふれ～さいたまから大山へ～」  
・土浦市立博物館「常総の大山信仰」

・川越市立博物館「川越の大山信仰」  
・大山阿夫利神社「開導記」